

「機器室の人」

米田 弥生

「トイレの花子さん」ならぬ「機器室の弥生さん」と呼ばれるようになったのは大学4年生になり研究室に入ってすぐの事。

私の卒業論文のテーマはとある遺伝子ファミリーの酵素活性を高速液体クロマトグラフィー（HPLC）で分析、測定する、というものだった。HPLCは研究室から少し離れた機器室にあった。私は毎朝始発に乗って研究室にいき、論文と実験材料を買い物かごに入れて機器室に一日中こもった。バッファーを流してカラムを安定させ、サンプルを調製し、ひたすらHPLCに通し、カラムを洗浄して終電で帰る。測定結果を表す紙を時には1ロール全て使い切ってしまう事もあった。いつしか私は「機器室の弥生さん」と呼ばれるようになり、授業に行っても私は機器室にいると思われていた。

私の実験系は至って簡単。酵素と基質を加水分解反応させ、その加水分解物をHPLCで分析する。加水分解されていれば元の物質のピークが減り、新たな生成物のピークが出る、というものだった。私がまず挑戦したのはすでに論文報告の出ている遺伝子の反応。すでに結果が出ている実験の確認だったので、何も気に留めていなかった。ところが、論文と違う結果が出た。それはポジティブな結果だった。その時、生成物のピークが見られた事が嬉しくて嬉しくて、すっかりHPLCに魅せられた。その後も実験は続き新しい結果が次々と出る中で、最初は絶対に外部の大学院に進学しようと思っていた私が外部進学をやめ内部進学をするまでになった。修士課程に進む頃には「機器室の弥生さんと呼んでちょうだい！」と自ら話していた。そんなHPLC漬けの毎日だった学士、修士の3年間。私の実験結果は少し名の知れた生化学の論文にも掲載され、その名に恥じない結果も出す事ができた。

「毎日毎日同じ事をやっていて飽きないのか？」と聞かれた事がある。とある会社の就職試験の面接では「HPLCはずっと単調作業の繰り返しだけど大丈夫？」と聞かれた。私はこういった質問はすごく残念だなと思っていた。他人から見れば単調作業の繰り返しで何も面白みがないのかもしれない。確かにじっと機械の前で生成物のピークを追う事は忍耐力も必要だ。でも私は自分なりにスムーズな実験方法を考えたりして工夫したりし、機械が古い事もあってトラブルも多かったがそれをメンテナンスするのも大きな仕事だった。作業だけ見れば「地味」「機械的」「単調」な作業だが、その中に自分だけの面白さや発見をする事は、次から次へと違う事をやっていくよりもむしろたくさん収穫があったと私は思っている。卒業する頃にはまるで自分の親友や家族のような愛着心も芽生えていたHPLC。

博士課程は違う大学院に進学する事にしたが、その後の研究生活でも自分の「HPLC 分析魂」は色々な実験において役に立ったと思う。人生のあらゆる場面で忍耐力や物事をじっと分析する力がついたし、人から見れば大した事ないと思われる事にもよく目を凝らしてみるようになった。完璧なマニュアル通りの仕事の中でも自分なりのステップアップの方法を見つけ、結果を出しながら自分自身のスキルアップもしてきた。

そして、時は流れ、私は今新しい「分析」を行っている。今年1月、娘が産まれたのだ。娘はよく泣くし思い通りにはいかない。そしてオムツ替えや授乳はルーチンとして毎日やらなければいけない。これはまさに HPLC 時代の忍耐力や単調作業の中での工夫が必要な事だと実感している。娘が自分の思い通りになってくれなくてもじっと耐えられるようになったし、泣いている原因を探って工夫する努力も出来るようになった。ルーチンな育児作業も自分なりに考えて効率よく進むようにしている。全てあの頃の実験がなければ私には不可能な事だったと思う。ただ、新しい「分析材料」はそれ以上に予想外の結果ばかりもたらしてくれるが・・・。

よく若い学生が「こんな事をして将来何になるんだろう？」と言っているのを耳にする。だけど私は、人生に無駄な事は何もないと思う。全然関係ないと思うような事が実はどこかでつながっているのはよくある事。大事なものはある事柄を「無駄だ」と思って何も考えずに進めてしまうか、「何かあるかもしれない」と思いながら意識を持って取り組むか、その違いではないだろうか。これからはさまざまな事に対して「分析」し、工夫を重ねていきたいと思っている。